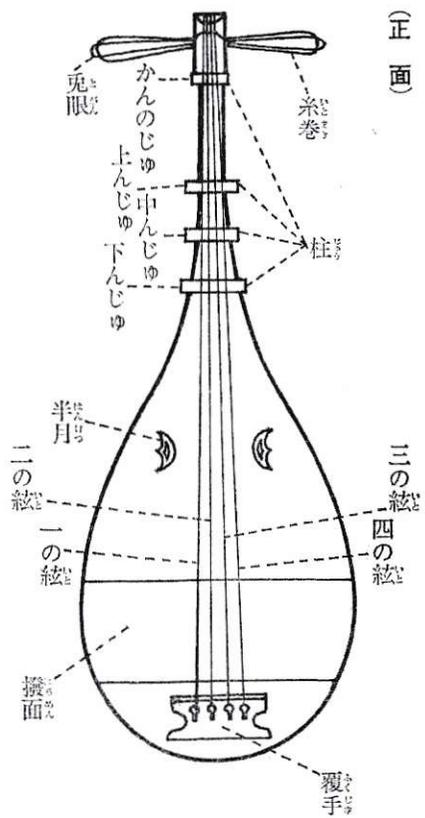
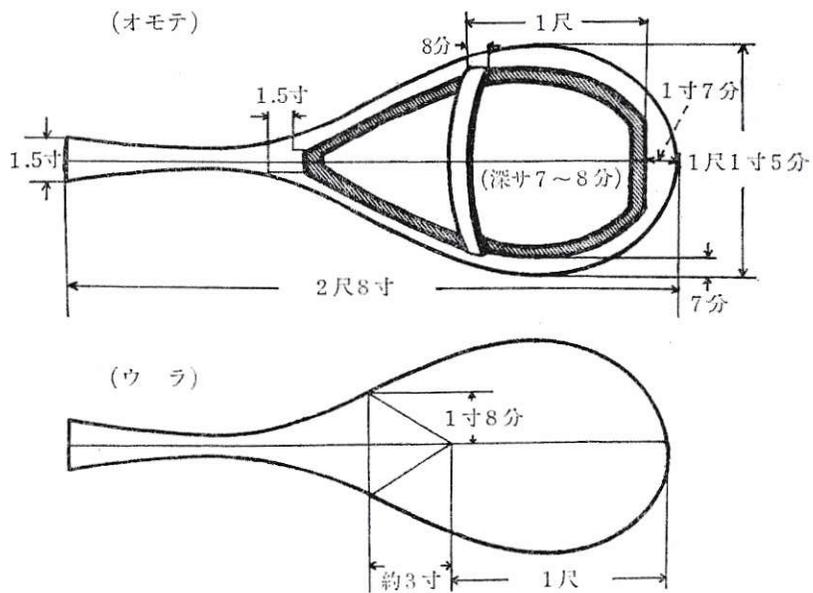


一——薩摩琵琶製作の工程

(一)——薩摩琵琶各部の名称



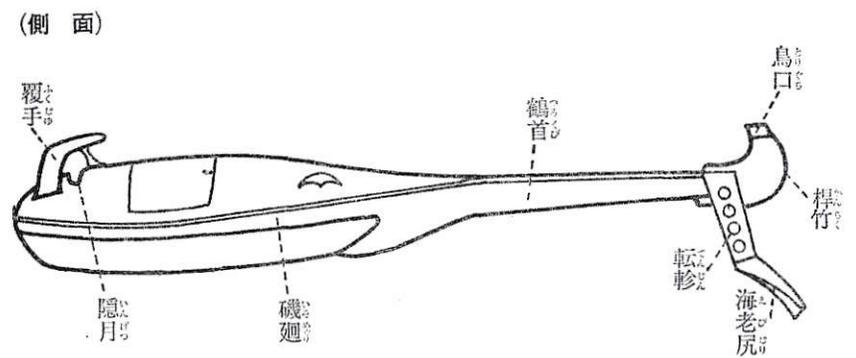
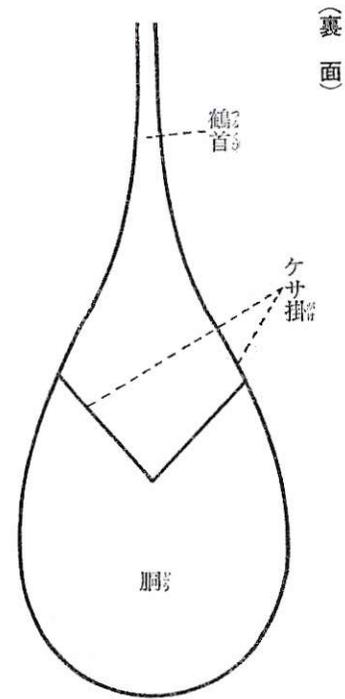


薩摩琵琶の胴の採寸

(二) 材

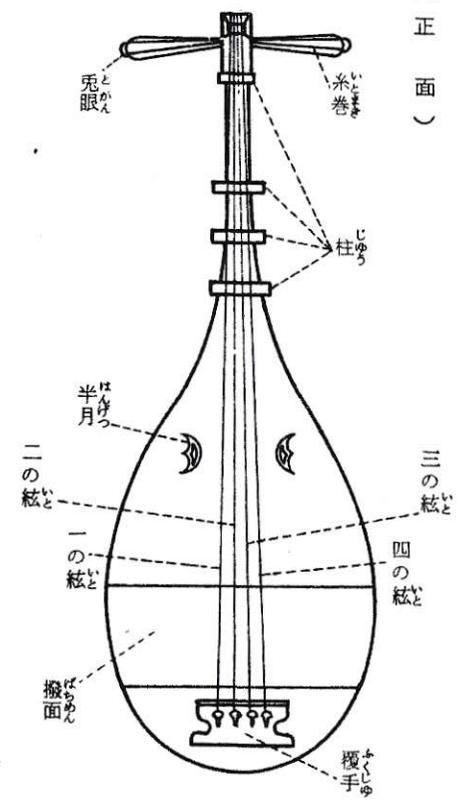
胴・腹板は桑を以て最良とする。次にケヤキ、桜、モミジ、梅などを良材とするとあるが、現在は桑の材で新しいものはほとんど得られない。既製の琵琶は桑が最も多く、ケヤキ、桜等も多く見られる。先年、竜洋会の田中義啓氏は、胴を紅木(ネムの木)・腹板をチーク材、紅木のみのも、桑材のみのも等琵琶六面を製作したが、旧来の琵琶と勝るとも劣らぬものを作成し会員に愛用されている。桑と同様の硬さをもつもの、あるいは異なるものも、その材質を研究すれば、他にも用いられる素材は幅ひろくあるのではなからうか。

胴の材は、長さ二尺八寸四分(約八十六センチメートル)、厚さ二寸(約六センチメートル)、幅一尺三寸(約四十二センチメートル)とし、海老尻は厚さ二

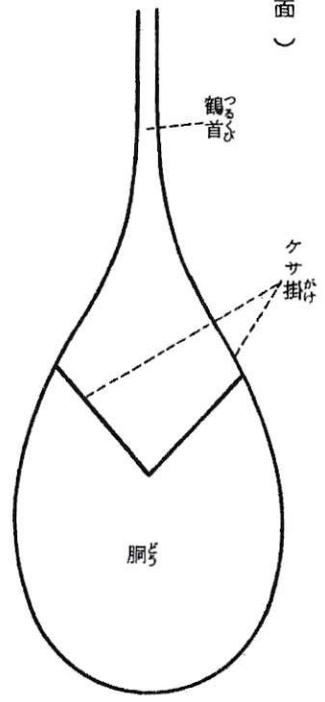


琵琶図解

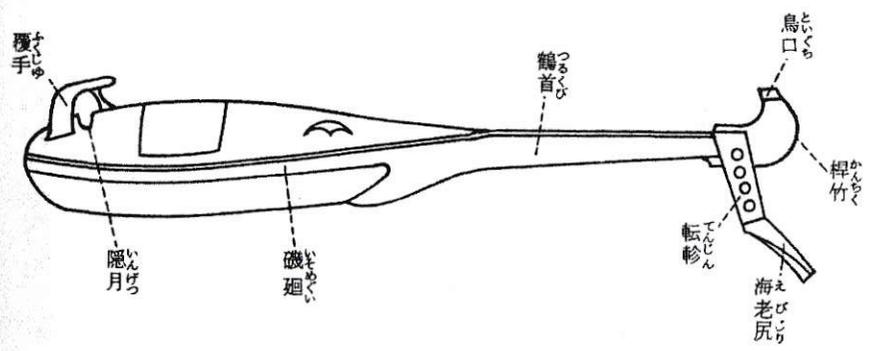
(正面)



(裏面)



(側面)



薩摩琵琶の由来

萩原龍洋述

祭具あるいは楽器としての琵琶の起源については、古代エジプトに始まり印度から中央アジア・中国を経て吾が国に伝わったという説あるいは印度に始まって、一はアラビア・ペルシャを経てエジプトに伝わり、一は中央アジアを経て中国・日本へと伝わったとする説など種々に説かれていて、結局のところ詳らかではない。いずれにしても琵琶は本来外来のものであって、海外から吾が国にもたらされたものであることだけは確かである。初めて琵琶が吾が国に伝わったのは、今から約千四百年前欽明天皇の御代、仏教の伝来と前後しての時期とされている。この朝に中国から来朝したある盲僧が、当時日向の鞆戸の附近で岩窟住まいをしていた盲僧遊教靈師に、地神陀羅尼經と土荒神の法とともに、祭具琵琶の妙音曲を伝授したのに始まるとされるのが一般であり、その他にも諸説があるけれども、ほぼこの時代をもって本朝琵琶の淵源として間違いないかと思われる。琵琶と盲僧との結びつきは、その淵源からしてかくの如く緊密なものであったことがわかる。

さて妙曲の伝授をうけた遊教靈師は、日夜五穀成就・国土安穩を祈りながら琵琶を弾じつづけていたが、これを伝え聞いた近国他国の盲人達は、進んで靈師のもとに馳せ参じて弟子となり、朝夕の勤行を始めることになった。靈師の没後、この勤行は九州一円に拡まり、薩摩においても、当時の阿多郡川辺郷長島寺や、嘯歌郡向ノ庄(現在の志布志町)大行寺を中心に、盲僧の間に盛んに弾ぜられていたと云う。

一方中央にあっては、今なお奈良の正倉院に国宝として蔵される琵琶(五絃)が物語るように、宮廷に入って愛好され、雅楽の中にもとり入れられた楽琵琶があり、平安初期の藤原貞敏以来、宮廷貴紳の間にもはやされ、王朝文学作品にも重要な楽器の一つとして屢々